

---

# P・E・R・S・O・N・A

七瀬なな

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

P・E・R・S・O・N・A

### 【Nコード】

N9573C

### 【作者名】

七瀬なな

### 【あらすじ】

不可思議な方法で創造主ノヴァに召還された謎の少女ペルソナ。彼女はなんのために、召還されたのか？

## 序 - 001

……水晶球。

そう、はじめの内 それ は、なんの変哲もない、ただの水晶玉に見えた。

宇宙にも似た漆黒の闇のただなかに、支え手もなくぼっかりと浮かんでいることを除いては。

やがて それは、ますますただの水晶玉らしからぬ様相を呈してくる。

俄かに乳白色の光を帯び始めたかと思うと、ほどなく周囲の暗黒を圧するまでに、力強く輝き出したのだ。

そして それは、まるで深い眠りから目覚めたばかりの生きものでもあるかのように、おもむろに自転を開始した。

それ 徐々に回転速度を増し、終いには、あまりの速さのため、停止しているようにさえ見えた。

その間に、無色透明だった それ の内部も、微妙に変化していた。

下部は金褐色、中ほどは緑、そして上部は青と、それぞれの色が、紗をかけたような乳白色に包まれて、おぼろに霞みながら互いに侵食し合い、競い合っている。

この奇妙な領土の奪い合いにも、ようやく決着がついたらしい頃それは荒々しい回転の仕方をやめた。

琴切れる寸前のオルゴールのように、たやすく止まりはしなかったけれど。

弱々しいながらも　それは止まりはしなかったのだ。

それは、もはや無機質なただの水晶玉ではなくなっていた。  
何故なら　それは、有機物質を内包していたのだから。

光と水と土と風。

これらの四大元素と、これらを巧みに循環させる植物群。

柔らかな緑の濃淡が鮮やかに織りなす天然の芸術品……そんな彼らが、まるで愛しい者でも守るかのように、精一杯ひろげた無数の手のひらの間から、ちらちらと見え隠れするものがある。

それは確かに、美しい彼らが想いを寄せるにふさわしい、建造物だった。

神殿だ。

十二本の円柱に支えられている内部には、台座がただひとつ。  
どこを眺めやっても瞳に焼きつくほどに純白で、不要な飾りも、ひとかすりの傷もついてはいなかった。

その荘厳なるたたずまい。

一陣の風が、最後の総点検とばかりに、この簡素な世界の隅々までを駆け巡った後、満足気な念が静寂を破り、清浄な空気の中に、残響を伴いながら溶け合った。

『準備は、整った……』

言葉に直すと、年はこのような意味を結んだ。

『出でよ、ペルソナ。いざ、我が元に……』

白亜の神殿に、変化が起こった。

先程まで純白以外のなにものでもなかった台座の表面に、黄金色の光の玉が揺らめいている。

光は台座の奥底から浮上してきているようだった。

光の玉は、やがて楕円に形を変え、台座いっぱい広がった。いまや台座の表面は、まばゆい黄金光の洪水に見舞われている。そして……その光の波の狭間から、忽然と現れいでたるもの……それこそが、創造主が、簡素なれど慎重に、丁寧な、わざわざひとつの小世界を新たに創ってまでも呼び寄せたもの。

ペルソナと、名づけられた者だった。

それは人間の形をしていた。  
十代の半ばを、まだいくらかも過ぎていないであろう、少女。素直に伸びたみどりの黒髪は腰まで届き、濃いまつげと形のよい三日月眉、それ以外はどこもかしこも、神殿の床や支柱に劣らぬほど白かった。

超自然の貴光は、急速に輝きを失いつつあった。

少女は身じろぎひとつしない。  
まるで千年も昔から、そこに横たわっていたかのように、沈黙だけを纏っている。

光が完全に消えてしまうのを待って、創造主は召還の儀式の、締めくくりの年を放った。

『目覚めるがよい。我が天と地との間に立つ者よ……』

それまで、ただ白いばかりであった彼女の肢体に、生命の彩りが宿り始めた。

薔薇色に染まった指先が、かすかに動いた。  
その指が一度こぶしを握り、ふたたび開く。

重たげなまつげが花びらのように震えて、まぶたの下から双の黒真珠が覗いた。

「ノヴァ……久しぶり」

ノヴァ。彼女は創造主を、そう呼んだ。

創造主がその昔、彼女をペルソナと名づけたときに、彼女は創造主をノヴァと呼ぶことに決めていた。

## 序・001（後書き）

【序・002へ続く】

読んでくれてありがとうございますm（―）m  
つづきを、おたのしみに

「また会えて嬉しい。ああ、ここの空気はいつ来ても清々しくて、いいね……ふふっ、当たり前か、出来立てのほやほやだものね」

ペルソナはやおら立ち上がり、台座に腰かけて伸びをしながら、のんびりと、つぶやいた。

だが、呑気な彼女とは対照的に、ノヴァの心境は複雑だった。

屈託ないペルソナをまのあたりにする毎に、罪の意識めいた痛みを覚えることが再三あるのだ。

ペルソナに会えることは……直接こうして対話できることは、嬉しかった。

完全無欠であるが故に絶対的孤独状態で存在し続けなくてはならぬ 彼 にとっては、心踊る楽しいひととき。

けれど、彼女を召還するのは、少なからぬ危険を孕んだ任務を与えるためなのだ。

ペルソナは 彼 を見失いかけた人々に 彼の想念を伝える巫女であり、心よわき人々を惑わす魔物を退治する狩人であり、また、人々をそれら魔物の脅威から守護するための騎士であるのだ。

有無を言わず運命づけたわけでは、無論ない。

ペルソナには選ぶ権利が、あった。

他の人間と、同様に。

ペルソナは、拒絶することもできたのだ。

すなわち彼女は、純粹にみずからの自由意志で受けて立ち、特殊な修行を積み、既に幾つかの任務を遂行し現在に至っているのだ。



るが。

ペルソナと再会する毎に、ふと、自分が彼女を選ばなければ、彼女は生涯を大した波乱もなく平穩無事に送れたはずなのだ、と彼は考えずにはいられなかった。

彼は万能ではあるが、冷徹ではない。

方程式では割り切れぬ、複雑な面をも多々併せ持っている。

彼の創造の産物である諸々が保有する、時に持て余すほどに豊かな感性は、まぎれもなく、彼から譲り受けた特質だ。

「……ノヴァ？」

いつもの、打てば響く返答が滞ったので、ペルソナが訝しげな声で虚空に呼びかける。

『私も、あなたとしばらくぶりに直接語り合うことができ、嬉しく思っているよ……』

おもむろに、彼は答える。

みずからの迷い、悩みは微塵も見せず。

おのれの感情でペルソナを掻き乱すなど、あつてはならないこと。

返事を受け取るとペルソナは、くすぐられたように肩をわずかに竦め、破顔した。

が、すぐに姿勢を正し、目をあげて、こう訊ねた。

「で、今回の任務は？」

ペルソナの心を占めるのは、冒険心と好奇心。

ノヴァに依頼されてここに在るといふ誇りと喜び、そして……意識下に潜む、ノヴァへのいたわり、思いやり。

いたわり。

絶対的存在に対して？

ちゃんちゃらおかしい次第ではあるが、ノヴァは失笑を洩らしたりなどしなかった。

このような一途な想いを寄せられて、悪い気がするのはひねくれ者だけだ。

そして 彼は万能ではあるが、ひねくれ者ではなかった。

『赴く世界に関する情報は、いつもの通り額飾りに。さあ、まずは洗礼を。鏡の泉へ行きなさい……』

「うん」

ペルソナは頷き、台座から飛び降りた。

床をつま先立って歩きながら、最初よりも大きな伸びをする。

昼寝から醒めた幼獣のようだ。

神殿の出入口には三段ほどの低い段差があるのだが、彼女はそこを踏まずにふわりと飛び越え、地上に降り立った。

並木を割って真っ直ぐに敷き詰められた白玉の路の向こうに、鏡の泉はあった。

一点の曇りもない空を、泉は瑠璃色に映し出し、さやさやと葉ずれの音を奏でる風たちも、そのおもてを決して乱そうとしない。

ペルソナは軽やかな足取りで、そこに歩み寄った。

つややかな長い黒髪が、物怖じせぬ主人とはうらはらに、ためらいがちに一呼吸遅れて、ついてゆく。

淀みない動作で、優しい曲線を描く大理石の縁に、跪く。  
水面に映る自分の姿を、覗き込む。

友人同士のように、光と影が笑みをかわす。

そのまま、まつげを伏せ、水面に顔を近づけてゆく。  
ちょうど、泉の中の自分自身と接吻したような格好になった。  
銀色の波紋が、ひろがる。

そうして、清涼な液体を一口味わうと、ペルソナは泉の縁を離れた。

もと来た路を、数歩ひきかえす。

その後再びくると泉に向き直ったとき……彼女の頬は、悪ふざけを企むやんちゃ坊主の茶目っ気で、紅潮していた。

歓声を上げて、ペルソナは泉に突進した。

助走のおかげで、泉の縁には簡単に飛び乗れた。

勢いを削がずに、そのまま泉水の中へ、踊り込む。

飛沫が跳ね上がり、水滴のひとつひとつが虹色の虹彩を放つ。

それらは、ひどくゆっくりと落下した。

無数の大小の球体が、しっとりと降り注いでくる。

この小世界は、重力のバランスが地球などとは異なるのだろう。

ペルソナは、降り注ぐ彼らを待ち受けた。

彼女はこの現象が、好きだった。

この光景を見たかったし、この光景に、浸っていたかった。

ペルソナは水浴びを、存分に楽しんだ。

ノヴァは取り立てて、咎めるようなことは、しなかった。

厳かに沐浴しようと、はしゃぎまわろうと、泉の効能に変わりはないのだし……いや、却ってじっとしている方が、難しいかもしれないかった。

泉は明らかに、ペルソナに活力を与えていた。  
オーラの輝きが、倍増したようだ。

ふいにペルソナは、はしゃぐのを止めた。

葉ずれの音楽に混じる蹄の音を、耳ざとく捉えた。

泉の縁に寄り、そこに肘をかけて静かに待つ。

泉と一体化したように、静かに。

ほどなく蹄の主は、木々の間から姿を現した。

再会する度毎に、ペルソナは感動を覚えざるを得ない。

赤いたてがみの、一角獣。

彼以上に美しい獣を、わたしは知らない。

そんな気持を素直に表した声で、ペルソナは一角獣を、こっぴどく呼んだ。

「……フィリス」

いまや、誰も使わなくなった古い言葉で、それは「炎」という意味だった。

## 序・002（後書き）

【序・003へ続く】

読んでくれてありがとうございますm（―）m  
つづきを、おたのしみに

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9573c/>

---

P・E・R・S・O・N・A

2010年10月14日11時59分発行